



Title	<書評>Timothy Willamson, Knowledge and its Limits, Oxford University Press, 2000
Author(s)	岸, 哲生
Citation	年報人間科学. 2024, 45, p. 113-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94580
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Timothy Williamson, Knowledge and its Limits, Oxford University Press, 2000

岸 哲生

1. 本書について

本書は現代認識論において近年注目されている潮流である知識第一主義の端緒となった文献である。知識についてのそれまでの考え方を転換することを目指す本書は、その後の研究動向に大きな影響を与えた。

現代認識論に対して本書の行った貢献は大きく分けて二つある。一つは、認識論において議論されてきた知識という概念を心の哲学という異なる領域の議論を援用することで新たに特徴づけたことである。もう一つは、そうした新しい特徴づけによって、知識によって信念を正当化するという現代認識論において全く新しい潮流を創始したことである。

知識とは何かという問題は、西洋哲学において最も古い問題の一つである。しかしこの問題が現代的な意味で論理的に定式化されたのは1963年のエドモンド・ゲティアの論文が発表されてからのことである。ゲティアは、それまでの認識論が知識という概念を「正当化された真なる信念」という概念と同一視してきたことを示し、後者の概念は前者の概念の必要条件に過ぎないことを証明した (Gettier 1963)。ゲティアの論文が発表されて以来、知識とは何かという問題は、知識を得るためには信念をいかにして正当化すればよいかという問題として、議論されるようになった。

20世紀末、複数の研究者たちが知識という概念がそもそも分析可能なのか、という疑問を抱いた (Zagzebski 1994, Craig 1991, cf. Ichikawa and Jenkins (2015))。その一人であるクレイグは、知識の概念を分析する代わりに、知識の価値などの観点から、知識の概念に説明を与えることを提案した (Craig 1991)。彼らの疑問はウィリアムソンに受け継がれた (Williamson 1995)。ウィリアムソンは知識は分析可能な概念ではないと主張し、その主張を擁護する自身の論文を1冊の本に再構成したのが本書である。前述のように、本書では、認識論のみならず心の哲学や言語哲学まで扱う広範な議論が展開されているが、特に、心の哲学における「心的状態」という概念によって知識を説明するという試みは、画期的である。

また、ウィリアムソンは本書において、知識によって信念の正当化をいかに説明するかという問題を提起した。このことは、本書の議論が認識論の従来の議論を反転させる方向に進むということを意味する。この新しい方向の議論は他の研究者に受け継がれ、知識第一主義という潮流として現在まで続いている。

2. 本書の構成

本書は導入部と12の章、5つの付録から成る。

第1章では「知識は心的状態である」というテーゼが主張される。そしてこのテーゼがゲティア以来の伝統的な認識論と対立することが示される。

第2章と第3章では前章で説明された心的状態について、内在主義と外在主義という2つの立場からの説明が対比され、前者への批判を通じて後者が擁護される。

第4章では、反明輝性 (anti-luminosity) という心的状態の特質が引き合いに出され、知識を心的状態とみなすことを批判する立場が検討される。人間の目分量では測定装置ほど精密に物体の大きさを測定することが出来ないように、心的状態の内容は精密なデータを反映しているわけではない。このような心的状態の性質は反明輝性と呼ばれる。知識が心的状態であるという主張を擁護するためには、我々の知識にも反明輝性があるということを証明しなければならない。第4章ではその証明が試みられる。

第5章から第7章では知識の反復性 (iteration) が議論される。知識の反復性とは、例えば「私は、雨が降っていることを自分は知っているということを知っている」という知識のように、「知っている」という語を複数回用いて知識の内容が表現されることである。本書ではこの反復性が知識の反明輝性と関連付けて論じられる。

第8章では第4章で証明された知識の反明輝性について、懐疑主義の立場からの批判が取り上げられる。そして懐疑主義が自己知識にまで懐疑を向けてしまうことによって困難に直面することが示される。

第9章では第8章での議論を踏まえて、知識が信念を正当化する証拠 (evidence) であることが主張される。本書でいう証拠とは、「血の付いたナイフ」のような物的証拠のことを指すのではない。例えば「今朝私は家の鍵を閉めた」という信念が「私は家の鍵を家から駅までの道中で落とした」という信念を正当化するように、ある命題的信念を正当化する別の命題的信念のことを指す。つまり第9章において知識による信念の正当化という本書の主題が論じられるのである。

第10章において、第9章の議論がベイズ主義と関連付けられる。ベイズ主義とは、人がある命題を信念として持つとき、その信念に対してもつ確信の度合いはちょうどその命題が成り立つ確率と等しい、という考え方である。第10章では、知識により正当化された信念に対して抱かれる確信の度合いがベイズ主義に基づいて議論される。

第11章において、第9章の議論は言語哲学へ関連付けられる。言語哲学では、ある事柄を断言することとは如何なる条件下において許されるのかという問題が議論されてきた (cf. Pagin2021)。知識が信念に対して概念的に先行するという第9章の議論から、ウィリアムソンは「 p ということを断言すべきであるのは、 p ということを知っている場合に限る」という規範を提示する。

第12章では構造的不可知性がフィッチのパラドックス (Fitch 1963) と関連付けて議論される。構造的不可知性は本書のタイトルにある「知識の限界」の一つである。第4章で導入された反明輝性が知識に外在的な限界であるのに対して、本書における構造的不可知性は知識に内在する限界である。

3. 知識は心的状態である

心的状態とは喜びや痛みを感じるなど、心の状態を指す。本書の特徴的な主張の一つは、知識が心的状態であるというものである。このテーゼが、本書では心の哲学における外在主義の立場を擁護することを通じて論証される。この論証は、内在主義への批判を通じて外在主義を擁護するという方針を取る。

心の哲学において内在主義とは、心的状態が環境の影響とは独立に決定されると主張する立場である。内在主義によればたとえ信念を心的状態と認めたとしても、知識は心的状態とは認められない。なぜなら知識の内容は、心的状態の内容と異なり、環境によって決定されなければならないからである。

それに対し、外在主義は心的状態が環境から独立に決定されないと主張する。外在主義を擁護するとき、心的状態は環境の違いに応じて異なる状態とみなされるため、その内容は叙実的なものとみなされる。外在主義の立場を擁護することで、ウィリアムソンは我々が直観的に知識とみなすものが心的状態と等しいものでありえることを論証する。すべての心的状態が知識なのではないが、叙実的な心的状態は知識と呼ぶにふさわしい。これが知識は心的状態であるというテーゼの意味するところである。

4. 知識は信念の正当化のための証拠である

現代認識論の主流では、「証拠」とは、ある信念を正当化する他の信念のことである。それに対し本書では、証拠とは信念を正当化する知識のことだと主張される。

ではこのようにして位置付けられた「証拠」は如何なるものなのか。本書ではこの問いに確率を用いて答える。つまり、ある仮説 h に対して、 e が仮説 h の確率（確からしさ）を高める場合、 e は仮説 h の証拠なのである。

このように特徴づけられた「証拠」という概念が「知識」という概念と同等であることを証明するために、本書では3つの命題が証明される。「すべての証拠は命題的である」、「すべての命題的な証拠は知識である」そして「すべての知識は証拠である」。これらすべての命題が証明されることで、「すべての知識は証拠であり、全ての証拠は知識である」という本書の主張が証明される。

5. おわりに

知識第一主義認識論はここ20数年の間に現代認識論の一潮流として発展してきた。本書が今後も現代認識論に影響を与え続けるであろうことは間違いないが、先駆的な著作である以上、本書で展開される議論の問題点やその方向性には多くの批判がある（cf. Greenough and Pritchard 2009）。それでも本書に読む価値があるのは、本書が認識論とは異なる分野とみなされてきた心の哲学を認識論の議論に初めて利用したことで、認識論の議論に新たな視点を与えたためである。本書以降の認識論においてさえ、心の哲学の議論をここまで本格的に関連付けた研究は知られていない。本書は20数年前に出版されたにもかかわらず

らず、その先進性は今も失われていないのである。

参考文献

- [1] Craig, E., 1991. *Knowledge and the State of Nature : An Essay in Conceptual Synthesis*, Oxford University Press.
- [2] Fitch, Frederic B., 1963. "A Logical Analysis of Some Value Concepts," *The Journal of Symbolic Logic*, 28(2): 135–142.
- [3] Gettier, Edmund L., 1963, "Is Justified True Belief Knowledge?", *Analysis*, 23(6): 121–123.
- [4] Greenough, Patrick & Duncan Pritchard, 2009, *Williamson on Knowledge*, Oxford: Oxford University Press.
- [5] Ichikawa, Jonathan Jenkins and C.S.I. Jenkins, 2015. "On Putting Knowledge 'First'," in J. Adam Carter, Emma C. Gordon and Benjamin Jarvis (eds.), *Knowledge First: Approaches in Epistemology and Mind*, Oxford: Oxford University Press.
- [6] Pagin, Peter and Neri Marsili, 2021. "Assertion," *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Wed Nov 17, 2021), Edward N. Zalta and Uri Nodelman (eds.), URL = < <https://plato.stanford.edu/entries/assertion/> >.
- [7] Williamson, Timothy, 1995. "Is Knowing a State of Mind?", *Mind*, New Series, 104(415): 533-565.
- [8] Zagzebski, Linda, 1994, "The Inescapability of Gettier Problems", *The Philosophical Quarterly*, 44(174): 65–73.